

## There is no friend as loyal as a book

「書籍ほど信頼できる友はいない」

暑い暑いと言っていた夏が終わり、あっという間に秋を迎えました。秋の代名詞と言えば食欲と読書ですが、今回は「読書」について触れます。

新しい学校に赴任し、楽しみにしていることの一つは図書館です。棚に並ぶ書籍には、それぞれの学校の特徴があります。図書委員や司書の先生の感性で異なってくるでしょう。本校の場合は、元女子高、そして女子の割合が多いので、蔵書にもそれが表れているように感じます。また、歴史のある学校なので、古い書籍も多く、倉庫奥にひっそりと眠る古書の中にはなかなか興味を引く物もあつたりします。

最近、たまたま共通した特徴のある本を図書館から借りました。「夏物語」（川上未映子著）と「宝島」（真藤順丈著）。前書は、子どもを産むこと、生命の意味について、後者は戦後からの沖縄を舞台とした若者達の物語です。どちらのストーリーもすばらしく、感動したのですが、それぞれ関西弁と沖縄の言葉で書かれているところが新鮮で、土地の言葉により物語に力強さを与えていることが分かる2冊でした。

先月の文化祭では、クイズに答え景品として、校長先生からの推薦本をもらえるという企画がありました。十代の生徒が興味を持つ本はこれしかないかと速決めしたのが、石田衣良の「池袋ウエストゲートパーク」シリーズ最新刊でした。物語は、東京池袋を

舞台に、アンダードッグ＝社会的弱者・敗北者たちを救うというもので、ちょっとマーベルコミック的な所もあるとはいえ、異なった面から現代社会の問題を考えることができる本です。私はこのシリーズ（1998～）が好きで、実家に帰ると時々、主人公になった気分になりながら、物語に出てくる場所を探しに池袋周辺を訪ね歩き、「読む」という行為とは別なところで「読書」を楽しんでいます。

今回のタイトル「書籍ほど…」は、「老人と海」の作者 E・ヘミングウェイ(1899～1961)の言葉です。本は真実を伝えるという意味で発したものですが、高校生に当てはめて考えれば、読書は将来を切り拓く親友であるとも解釈できます。

本を読むことは、方言の力に感動したり、フィクションとリアルな世界を重ねて楽しむことができる一方、文字を追うことにより想像力が鍛えられ、なにより言葉（話すこと・書くこと）の表現力が身に付きます。就職試験や受験の際には、面接や小論文があり、どの位、論理的に言葉を操れるかが問題になります。日常的な学習の合間に、少しでも読書をする機会を作ることで、結果、希望する進路に近づくことができると確信しています。

来年には図書館も新校舎に移り、ますます読書をする環境が良くなります。ぜひこの秋から本の魅力を再発見し、言葉を自由自在に操れるようになってほしいと願っています。



高校を卒業し、専門学校へ進学しました。学校は、新宿西口にあり、歌舞伎町へも歩いてすぐの所でした。東京の2大歓楽街と言えば、新宿と池袋です。新宿では様々な人や事件を目にしていたものの、当時、池袋にはもっと恐ろしいイメージがあり、近づくことはほとんどありませんでした。こんな時代を経験し、後にこのシリーズが好きになったと思います。物語に登場する池袋西口公園は、最近再開発され消滅してしまい残念でなりません。物語は過去ドラマにもなり、最近アニメ化されているようなのでいつか見ようと思っています。

シリーズの良い所は、忘れていた頃に書店で「わっ、新刊出た！」と、本を手にも自宅へ帰るまでものすごく心がワクワクと満たされることです。これからもそんな本に出会えると幸せです…。

文・猪股 成彦

